

説 教 『復活、心の沸騰』
 聖 書 イザヤ書 43：1～2／マタイ福音書 28：1～10

イエスは十字架につけられた。その不条理のほどは「わが神、なぜわたしを見捨てるのか(マタイ 27:46)」という神への抗議からも分かる。イエスが墓に葬られても二人のマリアは立ち去れずに(27:61)、悲しみの底に沈んだまま。信仰の権威者らは、死体を持ち去って「復活」が喧伝されないう厳重にガードさせた(27:63～64)。これほどガードを固めても、またどん底に沈んでいても、復活は起こる。

週の始め、日曜日にも二人のマリアは、悲しみを何とか納めようと墓へ行った。すると地震が起こって天使が現れ、「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった(28:3)」。この尋常でない出来事に、監視する番兵は「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった(28:4)」。稲妻の鋭い輝きは、人間の判断や武力を打ち砕き、同時にまた女たちの悲しみと絶望をも打ち砕く。この輝きが、人間には動かしがたい堅牢な「死」をこじ開けて、そこから新たな命を引き出すことになる。

信仰権威とローマによって遣わされた番兵たちは(27:62～66)、十字架で殺してもなおイエスを押さえ込もうとする力の象徴であった。しかし輝きによって「死人のように(28:4)」無化される。二人のマリアはどうだったか。彼女らは、虚無に沈められて力なく墓を見ていた(27:61,28:1)。イエスの面影を「死」に探していた。この視点もまた、天使の言葉でひっくり返ることになる。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていた通り、復活なさったのだ(28:5～6)」と告げ、遺体のない墓を確認させた(28:6)。

天使という超常現象に驚愕するあまり、覇権が死人のように無化し、女たちの絶望が転換したのであろうか。そうではない。たとえそうした怪異を経験したとしても、これほどの逆転はおこるまい。むしろ、こうだと思ふ。死が支配する絶望の場で、各々の立場の者が転換させられる途轍もない事が起こった。その何事かを「復活」と呼んだのではないか。人間にとってまことに大きな衝撃であり、「稲妻のように輝き、雪のように白かった(28:3)」と光の表象として描かれる復活。復活の中心は、「台風の目」のごとく見たり悟ったりはできないが、確かに世をその渦に巻き込んでいく神の力なのだ。

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜んで(28:8)」いた。とはいえ悲しみが喜びに変化したわけではない。恐れを抱えながら沸騰する言いようのない感情だろう。弟子たちの許に急いでいると、復活したイエスに遭遇する(28:9)。イエスは普通に挨拶し(28:9)、「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる(28:10)」と告げた。

逃げ去ってしまった弟子を「わたしの兄弟たち」と呼ぶ復活のイエス。背き、躓き、手放してしまう私であっても、兄弟として遇して下さい。それほどにキリストは、私の傍らにおられ、私と共に死に、私と共に生きて下さる。いや私が、キリストと共に死に、永遠を共に生きる(1コリント 15:20～21)。

「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの(イザヤ 43:1)」。預言者が語った通りだ。



《おまけのひとこと》

死を見つめ そこに慰めを探していた女たち 悲しみを切り離すための結び目をつくっていたのか
 作業台はひっくり返され 整えられかけた感情が 混じり合って化学変化を起こし 沸騰し始める